

ふたらさん
二荒山神社・神橋

Bridges of the World

栃木県・日光市



日本・2001年発行

日光山の参道へ入る直前に大谷川に架かる赤い橋を目にすることになります。神橋と呼ばれるこの橋には「山菅の橋」の伝承があります。二荒山へ向かう日光山の開祖・勝道上人一行が大谷川に行く手を阻まれたとき、山の神が現れ、青赤2匹の蛇を放って橋にすると、その上には菅が生え出たと言われます。

山菅の橋が本格的な橋として架けられたのは大同3年(808)のことで、それ以降16年ごとに架け替えられたと伝えられています。

架橋を命じられた山崎大夫は、丈夫な橋とするため刎橋を考案したとされています。すなわち川の右岸にある自然の穴を利用して、そこに乳木と呼ばれる特別に加工をした橋桁を差し込み、川の中に橋脚を設けない構造を作りました。この工法は秘法として受け継がれ、架け替えは深夜人目に触れないようにして行われました。

日光山が大きく変化したのは、山内に徳川家康の廟所・東照宮が造営されたときですが、寛永年間の大造営に合わせて神橋も架け替えられ、現在のような石造橋脚の上に木

造の刎橋が載せられた構造になったようです。このときから神橋は一般の通行が禁止されました。

神橋は、洪水による流失などにより江戸時代だけでも12回の改築が行われた記録があります。

現在の橋は、旧橋が明治35年(1902)の洪水によって流された後、37年に架けられたものです。古い姿が忠実に復元されているため国の重要文化財に指定されています。

橋長29m、幅員は5.6m、3径間の刎橋構造で、主桁は3列、両側の桁(刎木)の端部が岩盤や土の中に埋め込まれ、川中の2本柱の石造橋脚から更に刎ね出され、その上に長さ約11mの中央桁が載せられています。桁は断面が縦80cm×横70cmという太いもので、右岸側の刎木はおよそ13mで、約3分の1が埋め込まれています。左岸側はすぐ後が道路になっているためコンクリート製の控え橋台を作り、刎木がその上に置かれています。

高欄は、各部分の接続部に鍍金金具が用いられるなど非常に丁寧な造りになっています。また橋中央と両端の親柱の上に合計10基の擬宝珠が付けられています。



撮影：松村 博